

総保守は「大連立」を策動

参議院選後の政局の焦点

有権者階級構成

日本の総人口は一億二千七百万人。就業者は六千五百万人、雇用者（労働者）約五千六百万人だ。自営商工農業主、各種専門家、タレント、芸術家、作家、経営者層は約九百万人。失業者は「減った」といわれるけれど約二百五十万人。潜在的失業者は倍にもおおよぶ。したがって労働者（労働力を売る他に生きる術（すべ）を持たない者）は約六千三百五十万人となる。

有権者は一億人だから階級・階層別内訳は労働者階級約六四％、六〇歳以上の高齢者で無業者約二〇％、資本家階級中①大企業経営者約四万人の〇・〇四％、②小・中企業経営者約三百万人三％、③商工業主三百万三％、④農漁民三百万三％、⑤医師・弁護士、作家、芸術家等のいわゆるインテリ百万人一％、他は専業主婦、学生。労働者階級とその家族は八〇％をはるかに超える。

その投票行動

国会に席をもつ政党は、自民、民主、共産、社民、あとは自民系小党である。自民は財界（経団連）を最大の支持基盤とし、民主は労働組合・連合、財界の流通・サービス産業を厚い基盤とする。労働者を基盤とする共産、社民だ。

参院選で各党はどれだけ得票したか。投票率約五八・六％、総投票数は約六千万である。比例票で民主二千三百二十五万、自民千六百五十四万、公明七百七十六万、共産四百四十万、社民二百六十三万、自民分派の国民新党百七十七万、新党日本百二十六万、そして初陣の9条ネットは二十七万だった。共産、社民は憲法擁護を前面に、ネットは9条一本でたかかった。彼らが得た票は約七百三十万票、一二％だった。

労働者階級と家族は八〇％を占めるのに、労働者を支持基盤とする三つの党は、労働者からわずか一〇％以下を得たにすぎなかった。この数字は議席比にも反映された。共産三、社民二の計五。比例区改選議席は四十八、議席獲得率は約一〇・四％である。労働者と資本の利害は根本的に対立する。しかし、労働者の圧倒的多数が二つの保守党（自民、民主）に票を投じる。なぜか。

共産党の主張、政治腐敗への暴露、言論はすぐれている。その情報力を、民主、自民、民主の保守政党は恐れる。「反共」論の背景だ。しかしこの党の運動論は「参加、提言、改革」論で民主・連合と変わらない。全労連への労働者の不信はきわめて強い。社民は全国政党の地位はない。都市部に支持は弱く、東北・九州の主に旧総評の自治労に支持をもつにとどまる。

初陣の9条ネットは「体力不足」。先般の統一地方選は県議で共産百、社民五十二。政令市で百二十四、十五。区議で百三十四、十四。市町村七百七十二、百四十三。ネ

ット議員は百をはるかに超える。だが、共産・社民にくらべても基礎体力がおとつて
いることは明らか。課題は大きく情勢が移り変わるなか、9条を主張し生活をアピー
ルしながら、基礎体力をどうつけるかだ。

自民大敗北二つの原因

参院選で自民党が大負けした。なぜか。理由は二つだ。

第一。自民党支持基盤の動揺・「崩壊」である。自民党支持基盤の柱は経団連を中
心とする財界、土建業界・医師会に象徴された業界・業主団体、公共事業ばらまきに
よる地方（農・漁・林、商工業者）とりこみ、そして主婦・年金生活者層にあった。
このひろく厚い支持基盤で自民党活動家として集票行動をおこなったのが議員後援
会、各級地方議員、派閥の議員集団と秘書たちだ。

自民支持基盤は「三点セット＋α」が焦点となった、一九八九年参院選で動揺の兆
しをみせた。「三点セット」とは①農業自由化、②リクルート汚職、③消費税導入、
「＋α」とはウサギ小屋、働き蜂と世界からやゆされた労働者の働き様と生活だ。農
民、年金生活者、主婦、正義感の強い若者が地方と都市で「反乱」を起こし「山が動
いた」。結果、自民党大敗北となった。

自民党の基本政策は①行政改革から②規制緩和へ、③そして構造改革へと、独占資
本中心がヨリ露骨になった。世界市場の急膨張、産業構造のいちじるしい変化、地方
切り捨てで古い利権から新しい利権へ全面的な規制緩和を強め、独占本位の政策をよ
り強めたのだ。自民党内の動揺は自民党分裂となり、政界再編への幕が開かれる。

総資本は政府危機が政治危機に発展することを恐れた。総資本は「お庭番」、政治
改革推進会議（民間政治臨調）をつくり、「保守二党制」づくりの準備に入った。政
・財・官・労・学・マスコミの社会上層部が動員された。自民党分裂を契機に社会党
をブツ壊すとの策謀、小選挙区制導入である。細川護熙、小沢一郎が彼らの手足とな
った。

自民党は「橋本六次行革」で弱者切り捨てを明確にした。すでに地方の「銀座通り」
は大店法、駅中商店街でペンペン草がはえていた。国鉄、電々、専売の民営化は地方
の一等地を遊休地とした。地方の荒廃はだれの目にも明らかだった。地方での自民党
支持基盤は動揺から崩壊へを加速させていた。

こんな時、小泉純一郎は「自民党ブツ壊す」と登場。タレントすら足元におよばぬ
人気者となった。構造改革は独占資本のための政治である。必要不可欠な公共事業は
都市再開発、環境、技術開発にとつて代わられ、かれん誅求が国民にのしかかった。
こうして古い自民党支持基盤は切り捨てられた。その象徴が今年の「郵政」選挙であ
る。そして市町村合併による各級地方議員の絶対的減少である。支持基盤のみならず
活動家をも切り捨てた。

第二。安倍君の失政である。自民党支持基盤は壊れつつあり、地方が悲鳴をあげて
いることは夕張市に明らかだった。安倍君は「参院選に勝てる」顔と総理・総裁にな
った。彼は小泉とちがい十分な準備期間があった。違いは小泉は奇人、変人であるの

に安倍は凡人だったことだ。凡人には逆立ちしても奇人、変人のまねはできぬ。凡人は「美しい国」を九官鳥のようにくり返すばかり。その主張の背後で「みにくい国」の様が暴露されつづけた。新たな「三点セット+α」である。

「三点セット」とは①政治とカネ、②年金問題、③失言問題であり「+α」とは格差、国民生活の疲弊である。致命傷は閣僚の不祥事、相次ぐ辞任である。安倍君そのものが問われた。その結果が支持率凋落で二〇%台の惨状である。

小泉は自民党をブツ壊すと自民党の支持基盤をこわし、都市だけでなく地方でも「支持なし」層をふやした。地方は自民党の構造改革に悲鳴をあげていた。

特措法が政局の焦点に

民主党は大勝した。自民党の支持基盤の動揺を巧みについた小沢戦略が大きな原因だ。地方は「地方への厚い」政治を求めた。民主はその声を票にしたのである。この背景には自民と民主に政策的に大きな違いはなく、安心して投票行動を変えることができたことがあった。保守二党制の定着である。

九〇年代以降。「支持なし」層が五〇%を超えるまでになった。マスメディアは「無党派の取り込み」がこれからの選挙戦の課題といい、「二世紀臨調は「マニフェスト政治」への誘導をはかる。政党にとって組織は必要なのか。ウソである。政党にとって「組織」こそが生命だ。党の政策を本気で実現しようとする時にはそうである。

民主党は参院で与野党逆転を第一のステップに、次の衆院選での政権獲得をめざす。九月に開かれる臨時国会は第二のステップとなる。小沢は「参院第一党の責任を果たすことは、政府・与党と話し合い、協力して足して二で割ることではない」と。①年金保険料流用禁止法、②国民新党、社民党と共同で郵政民営化見直し法案、③十一月一日に期限切れのテロ特措法延長反対、④国政調査権発動で自民と真っ向から対抗する方針を固めている。

とりわけ今後の政局のゆくえをみる上で重要なのは特措法だ。小沢の主張は①私自身も民主党も国際平和のため日本は積極的に貢献しなければならないという思いを自民政権移譲に強く持っている。②アフガン戦争は『これは米国の戦争だ』とブッシュが始めた戦争。国連安保理決議と、米国の戦争では全く性格が違う、③自衛権の発動は個別であれ集団的であれ、自国が攻撃を受けた場合に限るという憲法九条の解釈としている、④日本の平和と安全に直接、関係のない地域での米国や他国部隊と共同作戦はできない、⑤国連のPKO（平和維持活動）には積極的に参加する。

総保守勢力は与野党逆転下の国会運営が政治混乱から政治危機に転化することを恐れる。そこで画策されるのが「民主党」も『政権責任』を分担せよ」との主張からの大連立構想である。読売は八月一六日の社説で「秋の臨時国会が自民、民主両党の立前論がぶつかり合うだけの状況になる前に、両党は早急に大連立の可能性を探ってみてはどうか」と誘導する。

我われにとつての関心事は、「地方の反乱」を「国民の反乱」に発展させることである。その時、憲法改悪反対の力がつくられる。

（滝野 忠）

護憲勢力の退潮を打破する力

―生まれて初めての選挙闘争を闘って―

なんか手応え感じてきました！ 「9条ネット」

やってしまいました！ 炎天下でのチラシの戸別ポスティング。なかなかハードなものです。まず、この暑い中、地道に選挙運動を頑張っている野党応援団（もちろん9条ネットに限らず）のみなさんとエールを交換したいです！ 「みんなそれぞれの持ち場で、同じ思いで汗を流しているのだ」となぜか一人で感動しながら、それを力にして住宅街を歩き回ってきました。

炎天下でのポスティング 私はこれまで自分たちの会の通信を3号出してきましたが、時間と体力を考えてポスティング業者さんか新聞折り込みで配布していました。今回もちらつと新聞折り込みを提案したのですが、地元の9条ネットはけっこう体育会系で（もちろん、しごきとかないですよ！）、リーダー以下みんな「街宣とポスティングで頑張る」ということだったので、私もそうしました。すると恐怖の梅雨明けで、頼まれたチラシはまだたくさん！ 日程の都合上、今日の昼間しかまとまった時間は取れない・・・ということ、いざ出かけました。

これまでの街宣の経験では、中年以降のおじさまがチラシを受け取ってくださる率が高く、天木さんを知っている人もダントツ多かったです。侮れないおじさまパワー。そこで、今日は、そろそろ退職している方が多そうなちよつと年数の経った住宅街に行きました。この暑さですから戸外に出ている人はとても少なかったのですが、ターゲットの退職後のおじさまらしい人影がちらほら見られ、作戦成功!?

たまに外に出ている方とお話しすると、9条ネットを知っていたり、あるおじさまは「あの大使の人が立候補しているところでしょう。立派な人だねえ。当選してほしいね」と励ましてくださいました。お話しできた人は少数でしたが、何だか確かな手応えが出てきた感じです。

9条ネット「なんじゃ、それは？」 自分が書いた最近の選挙関連の記事を読み直すと「なんか、鬱屈しているなあ」と感じます。それはなぜか、今日わかりました。情報が閉ざされていたからです。世の中に9条ネットの情報が、おそらくかなりの部分マスコミにフィルターをかけられて、あまりにも少なく、アピールしようにも「なんじゃ、それは？」状態だったのです（もちろん、一部の方を除く）。天木さんを知っている人は相当数いるのですが、9条ネットからの立候補と結び付いていませんでした（これは賛同人に登録して下さっている方のなかにもいて、びっくりしました）。

それが、選挙公報や政見放送、選挙ハガキ、ロコミ・・・と、情報が広まるにつれて、やっ普通選挙活動をしているという感触が出てきました。いまでも世界には情報が規制されている国は多いです。そして、おそろしいことに、日本も大きなベクトルはそちらを向きかけています。

今日は戸建て住宅の並ぶ街の一丁目から七丁目まで歩きました。私はぼんやりなの

で、配った枚数はよくわかりません。「チラシ配布中の選挙ボランティア、熱中症で倒れる」という新聞記事にならないように(なっても9条ネットとは書いてくれないでしょうし)、水分補給だけは気をつけました。スポーツドリンクとお茶でペットボトル三本を消費。郵便配達の人とは「暑いですねえ」と励まし合い、最後には帰るのが惜しいような、ハイな気分になりましたが、予定時間の三時半に終了しました。チラシはまだ少し残っていますが、何とか配布完了のめどが立ちました。

確実に手応えはよくなった 選挙って地道でたいへんなものだなあと、何度目かの実感。でも私の性格では、こういう黙々仕事が続けよう合ったりします。楽しい気分です。選挙ボランティアを終え静かな気持ちです。でもこれだけは書いておきたい金、土はどうしても時間が取れず、私の選挙ボランティアは実質、木曜日まででした。木曜日の駅でのチラシ配りではマニフェストやチラシの受け取りもなかなか良く、「もう9条ネットに投票したよ」と言ってくれださった男性、マニフェストを手渡すと私の知らない推薦人の鈴木裕子さん(女性史家)の名前を見つけて「この人の本はいいよ。読んでごらん」と逆に教えてくださる方もいて、やはり確実に手応えはよくなっていました。

チラシ配布、街頭宣伝の裏方、ポスター貼り、選挙ハガキを知人宛てに書く、気心の知れた人には資料を手渡す・・・本当に小さな力ですが、時間と体力の許す限り、私にできることはしました。いまは静かな気持ちです。

一年前のいまごろは、自分が選挙応援のボランティアをすることなど、夢にも思っていないませんでした。もともと野党的な考えはあり「権力は腐敗しやすいため、アンチテーゼとして野党が拮抗していなくてはならない」と漠然と思っていて、まず自民党には投票しませんでした。投票日に用事があれば棄権もするという出来の悪い有権者でした。

でも、それは心のどこかに、自民党の政権であっても基本的には国民のためを思って政治をしてきているだろうという安心感があったからです。民主主義、国民権や平和主義は、もう日本では自明の理となっていて、そのあたりの原則が後退することはないだろう。いま思えば、本当にのんきな考え方ですが、そう信じていました。

社民、共産、9条ネットが不振である一つの理由―戦争と平和

おおげさなタイトルをつけてしまいました。話した話ではありません。新聞の読者投稿欄で見つけた投書の内容です。出産直後の三〇代前半の女性の文章で、おそらく真面目で善意の方なのでしょう。要旨としては、「自分たちの世代は戦争体験がなく、上の世代から話を聞く機会もほとんどなかった。子ども世代に戦争について語り継いでいかななくてはならないと思うので、戦争を体験された先輩のみなさん、戦争を知らない世代にその体験をできるだけ聞かせてください」という、しごく真つ当なものです。

ただ、細かい表現を見ると、「子どもたちのためにも、平和な時代が続いてほしい・・・」とか、沖繩など戦跡を訪ねた時の感想として「今はこんなに平和なのに。

なぜ戦争が起きたのだろうか？」という疑問を抱いています。

そう、全体の文脈から見ても、表現から見ても、まず間違いなく「今は平和な時代なのだ」と思っているのです。そして、私のリアルの世界での感觸でも、そういう感じ方は二〇代、三〇代という若い世代で、特に政治に興味が強いわけではなく、普通に市民生活を送っている人にかなり共通したもののように思えます。

インターネットでこれだけ、戦争や憲法改正が論じられていても、それとは全く関係なく「平和な時代」と思っていて暮らしている。私はイラク戦争に派兵した時点から（遡れば、湾岸戦争やアフガン侵攻支援も入ると思いますが）、日本は戦時中だと思おうのですが、多数の人はどうもそうは思っていない。意識の落差は途方もなく大きいように思います。

オブラートに包んだようなマスコミの報道姿勢、教育現場での戦後史の教育不足、投書した人も書いているように戦争体験を語らない日本人の性癖など、さまざまな理由はあるでしょうけれど、根本にあるのは（偉そうな言い方になりますが）「想像力の欠如」のように感じます。新聞をちよつと読めば、イラクやアフガンで自爆テロ等でたくさんの人が亡くなっていることは書いてあります。そして、日本が復興支援の名目で自衛隊を派遣したこと、米軍の支援をしていること、米軍は戦闘をしており、双方多数の死傷者が出ていることはわかるでしょう。

それを日本の平和問題と引き寄せて考えられない。どこか、遠い物語の世界で起こっていることのように感じてしまっているのではないのでしょうか。そういう私も、イラク戦争が始まるまでは各地の内戦、難民、飢餓などのニュースを聞いても、心を痛めながらも結局は他人事のように思っていた面がありますので、いまピンと来ない人の気持ちもわかる気がします。

「いまの日本は平和だ」と思っている人が多い限り、社民、共産、9条ネットなど、いわゆる護憲政党が9条問題をいくら必死で訴えても、それは有権者の頭の上を素通りするだけになりそうです。現在起こっている戦争を自国の問題、つまり加害責任があり、さらに報復の対象になり得る大きなリスクを負っている、また財政上も大きな負担になっているという捉え方ができない限り、9条護憲や集团的自衛権、テロ特措法などの問題を多くの人と共有することは難しいような気がします。

そのために何か良い方法はないのでしょうか？ それとも、もしかして私の方が心配しすぎて、多数の人の見方が的確なのでしょう。でも、米軍再編、国民保護法・・・（たくさんありすぎて挙げきれません）など一連の政治の方向、憲法問題などを知ると、到底そうは思えません。いつも頭のどこかで考えているのですが、なかなか良い案が浮かびません。

私たちの組織（「教育基本法を読み学ぶ市民の会 in 滋賀」、詳細は団体名のHP 検索を！）は教育基本法政府案に疑問を持つ普通の市民・保護者が集まった小さな会です。ほぼ全員が無党派、市民運動初めてという超初心者が集まりますが、頑張っています！

〔9条ネット・滋賀〕賛同人・藤沢 ゆい子

「反革命」をうち破った力 ボリバリアーノ委員会

―ベネズエラ革命の現段階（下）―

憲法制定議会をつうじて

チャベスはどのような戦略と戦術で権力者となり、社会改革を实行するようになったのか。彼はクーデター（一九九二年二月）による権力奪取の失敗から①軍内での運動は不可能になった、②大衆の支持は不可欠、③武装闘争を放棄、④大衆とともに進む「平和革命」の道を選択しました。一九九三年～四年ごろのことです。その頃、ベネズエラには全国的に組織された革命政党がありません。どのように、大衆との接点をもつか、当時のチャベスの最大の関心事でした。

チャベスが選んだ道は議会選挙への参加、そして制憲議会を呼びかけることでした。合法的手段で憲法制定議会をいかに招集するかです。チャベスは釈放されると国中を旅しました。大衆を組織化するためにです。

古いベネズエラ憲法は①主権は国民にある、②公権力の制度を通じて主権を表現できると定めていました。チャベスは共和国大統領を獲得することをめざしたのです。権力、大統領となれば大衆に立脚した立場から憲法制定会議の国民投票を呼びかける。国民投票で憲法制定会議が認められれば新しい議会をつくる。新しい議会は大衆の利益のための、新しいベネズエラをつくる憲法をつくり、国民投票にかける。大統領は権力者として新憲法を実行し、新しいベネズエラの国造りを開始するということです。

チャベスは一九九八年十二月に大統領に当選するや、上記の構想を実践します。一九九九年二月に憲法制定議会をめざす国民投票がおこなわれ成立。憲法制定議会選挙は七月におこなわれ、チャベスを支持する統一戦線組織（愛国極同盟）が一一一議席中一二〇議席を獲得。ただちに新憲法が起草され、国民投票に付されたのは十二月、七〇%超の支持で承認された。いわゆる「ボリバリアーノ憲法」です。

二〇〇〇年、チャベスは新憲法下、大統領に再選。ベネズエラ革命は過渡期から実行段階へと進んだのです。チャベスは憲法にもとづき民衆の生活向上に①土地法、②漁業・農業法、③小口融資法、④石油法など四九法をつうじ、理想を実現し始めます。キューバとの連携が強められたのもこの時期で、医療・教育改革（識字運動）がキューバの支援で進められ、エネルギー（石油）協定が結ばれます。キューバはベネズエラに医療関係者二万四千人、うち医師一万二千人を派遣していますし、キューバの医師養成学校（ラテンアメリカ医学校）に約一千人以上の学生が学んでいます。

反革命、資本家ストを粉砕

この時期、チャベスは石油の国有化等の「社会主義」的政策を实行する力はありませんでした。権力強化を促したのは旧支配階級の反チャベス派の①軍事クーデター、②資本家団体のストライキ行動でした。

二〇〇二年四月、將軍たちがクーデターをおこしました。しかし、八〇%以上の將

軍たちがチャベスと憲法を支持し、クーデターは失敗しました。クーデター失敗は軍の解体・再建の力となったのです。

二〇〇二年十二月には財界、労組、ベネズエラ石油会社（PDVSA）幹部によるストライキがおこなわれました。ベネズエラの「富」の元は石油です。石油生産を止めれば財政は立ちいかなくなる。経済的混乱は社会、政治情勢を危機に陥れ、チャベスの政治基盤は失われるとの目的でおこなわれたのです。

チャベスはこれら「ストライキ」を大衆的な動員で打ち破りません。この結果、石油産業が国有化されると同時に、民主化に反対する石油企業の高級、中級管理者役一万八〇〇〇人が法律で解雇されました。

チャベス反対派は、二〇〇四年には憲法の規定にある「大統領の罷免要求国民投票」を逆手にとり国民投票を要求。ところが、罷免国民投票は六〇〇万対四〇〇万でチャベスを承認したのです。

国民投票はさらに大きな力をチャベスに与えました。頭がまっ白になったチャベス反対派は〇五年十二月の議会選挙をボイコット。その結果、議会議員はすべてチャベス支持者となった。五万二〇〇〇ある自治体でも同様の過程が進行しています。

チャベスの権力基盤がさらに強化されたことを示したのが昨年（〇六）十二月の大統領選挙でした。チャベスは反対派に三〇〇万もの差をつけたのです。チャベスが「二一世紀の社会主義」、「石油の国有化」を主張する背景です。

チリとベネズエラー大衆運動

チリのアジエンデ政権とベネズエラのチャベスはどこが違うのか。

チリはラテンアメリカでもっとも民主的な国でした。統一戦線の経験は一九三〇年代にもあった。アジエンデ政権は社会党、共産党中心に極左グループ、労働組合が参加する統一戦線政府だった。反アジエンデグループは資本家スト、国際金融グループ、国際銅カルテル、米の電信電話会社（ITT）の支援を得、ピノチエトに軍事クーデターをやらせた。それは今のベネズエラでも同じでした。

まず軍部。ラテンアメリカの諸国では陸軍が圧倒的な力をもつ。海軍、空軍はなきに等しい。アジエンデは陸軍内に支持者をもたなかった。だから、ピノチエトが軍事クーデターをおこなった時、彼らを支援する将軍、兵士はおらず大統領官邸で「戦死」した。ベネズエラでは違った。反乱を起こした将軍たちは部下にとらえられました。

もう一つは大衆運動だ。ベネズエラでは四〇人を超える将軍・提督がクーデターを起こし、それを民間テレビが支援した。資本家ストに八百万超の人民が丸腰で大挙して街頭に出、兵営を包囲。大衆の圧力、チャベスを支持する軍部の支援がクーデターを四八時間で失敗に追い込んだのです。チリではピノチエトに反対するそのような運動はありませんでした。

ベネズエラには労働者は多くありません。政党はPPT（みんなのための祖国）、AD、COPEI、URD等があります。それらの党で大きな力をもっているのはインテリゲンツィア層が中心です。チャベスの運動は「できあがった」党によって達成

されたものではありません。チャベスがめざしたのは運動の基礎組織としてポリバリアーノ委員会をつくったことです。チャベスは全国を旅し人民の間で、地域社会、町内会に結成を呼びかけました。

運動としてチャベスが最初につくったのは「ポリバリアーノ軍二〇〇」です。一九八二年十二月、軍隊内のことです。この名称はシモン・ボリバル生誕二百年を記念して名付けられました。カラカソの後には新たな軍人や市民が運動に参加し、「革命的ポリバリアーノ運動二〇〇」（M B R二〇〇）と改称します。この時、彼らと連携をもったのがカウサRという政党でした。

「M B R二〇〇」がM V Rに組織変えされたのは一九九七年から八年のことで、M V Rは選挙のためにつくられた「政党」です。その中心はポリバリアーナ委員会、あとに「シンクロ・ポリバリアーノ」と呼ばれます。組織は七人から十人、一五人で街ごとに、油田ごとに、工場、学校、技術学校、居酒屋先住民社会につくられました。

このような地域を単位とした運動体の他に労働者集団、女性集団、青年集団、農民集団が組織されています。全国のあらゆる場所に社会的網状組織を作る。そしてこれらの網状組織が水流をつくり、それらが一体となって社会転換の大河をつくるのが構想です。九二年のクーデター、九三〇四年の資本家ストを打ち破った力はこれら運動が全国的につくられ、根付き、活動していることのあらわれです。

キューバと友好・連携

革命が新たな段階に入った今、ベネズエラでは革命運動を推進する政党の樹立が大きな課題になっています。現在、ベネズエラの議会と政党の構成は〇五年十二月議会選挙の結果、M V R（第五共和国運動）一一八、P o d e m o s（社会民主主義党）一八、P P T（皆のための祖国党）一〇、P C V（ベネズエラ共産党）七、その他一四との構成で、一院政一六七議席からなる議会はチャベスを大統領とする与党連合が全議席を占めています。これは〇五年十二月選挙にチャベス反対派の政党A D（民主行動党）、C O P E I（キリスト教社会党）、P R V Z L（プロジェクト・ベネズエラ）が、資本家スト失敗、大統領罷免の国民投票で敗北したことに抗議し、選挙をボイコットしたことによるものです。

すでに述べたようにラテンアメリカではアメリカと一線を画する政府が増えていきます。当初、「チャベスは独裁者」とみなしていたこれら指導者たちもチャベスの国内政策の進行に安心して彼を迎え入れる傾向を強めています。とりわけ、キューバとの連携は教育、医療、農業を中心に新しい国づくりのモデルとなるばかりか、キューバの社会主義建設の基礎組織となっている地域段階からの組織づくりを参考に行っていると思われまます。

チャベスは権力基盤を固めつつあります。他方、敗北につぐ敗北を重ねた野党勢力、資本家グループは敗北から学び態勢を整えつつあります。反チャベス勢力は「憲法は認められない」との立場から転換し、憲法を認める立場から、どう合法的にチャベス政権を転覆するかの方針を示しつつあるからです。

労働組合 “再建” の条件

— 現代情勢の特徴 —

「窮乏化」法則の発現

労働組合とは何かが問われている。労組最大の存在意義・役割は「競争の排除」、それを団結の基礎に労働諸条件、さらには社会的に生活向上をめざすことである。「市場経済」、つまり資本主義社会の絶対的法則は剰余価値の追求、その象徴的手法がトヨタ生産性方式であり、最大限の利潤を求めての特別剰余価値を手に入れようとの独占企業間の競争である。

競争は激しくなった。その背景に①世界市場の拡大、②「少子化」等による先進国内市場の縮小、③IT・ME技術応用による生産性向上、④資本の有機的組成の高度化による産業予備軍の増加、⑤資本の海外進出による先進国労働者と発展途上国労働者の競争、⑥金融資本の援助による投資ファンドの企業売買のひろがりがある。

世界市場の急膨張と、猛烈な資本輸出による過剰生産、とどまることのない技術革新による生産価格の低下は、独占資本間の「安定した」市場支配を破壊し、新たな市場の独占とそれにもとづく独占価格確立にむけた競争を激化させた。「資源競争」もその一つである。

資本間の競争は労働者にも影響を与えずにはおかない。生産性向上による資本の有機的組成の高度化、技術力の労働・生産過程への応用は労働を単純化し、産業構造の変化は単純労働を絶対的に拡大する方向に作用する。

資本の原始的蓄積期には羊が農民を食った。産業革命以降には機械が手工業者を安定した生活から追い落とし、農民・手工業等を産業予備軍に代えた。それまでの牧歌的な生活は絶え間ない変革と競争に代えられたのだ。今、それと同じことが眼前で展開されている。競争は賃金を押し下げる。労働者間の競争は激しくなり、団結の基礎は揺れていく。そして労働者と資本家間の競争は、資本家優位の方向に作用する。こうして、資本主義的蓄積の一般的法則である「窮乏化」が全社会的に現出しているのが現情勢の最大の特徴である。

格差が先般参院選の最大争点となった。不熟練労働者と熟練労働者、都市と地方、剰余価値を支配する者と搾取される者との不平等にもとづく格差は、資本主義社会のこれまた一般的な法則だ。不安定雇用労働者群が拡大再生産され、「ワーキングプア」なる労働者が現れ、正社員と不安定雇用労働者の賃金格差は拡大する。なぜか、独占資本間の競争激化のなかで、労働組合が労組の存在意義・役割を放り投げてしまったからだ。

労働条件は一九世紀に逆行り

一九八〇年代後半の労働戦線再編成で、労働運動はすっかり姿・形態を変えてしまった。現在の労働運動の中心勢力は、民間基幹産業—自動車、電機、鉄鋼、造船、重

化学工業―の労働組合でつくる金属労協（IMF・JC）だ。JCは産業別組合を名乗るが企業別組合の「寄り合い」世帯。組合活動の基本を①企業の発展、②世界競争戦での生き残りにおく。

大企業の「企業の発展」は労働者にどんな影響を与えるか。不況の時、大企業の正社員ですら「企業の存続」を口実に首切られ、賃金・労働条件は切り下げられた。労働者数が絶対的に減少した。したがって、組合員数も減った。企業発展には総資本を減らし、剰余価値率を高め、利潤率を上げることが絶対的必要事となる。賃金分野では正社員の非正社員化、アウトソーシングによる正社員の絶対的な賃金切り下げ。

自動車産業にはつきりみえるが、自動車会社本体は子会社群が生産する部品を組み立てるだけである。下請け会社には①単価切り下げ、②納期厳密化が強制される。労働者数、設備は絶対的に減らされ、慢性的な労働力不足の中で史上最高の製品群がつくり出される。

生産性向上は労働組合の強い規制力がない時、かならず安全・安心と衝突する。長時間労働、強権的労務管理は軍隊同様の「階級社会」となり、労働災害、精神疾患をふやす。「窮乏化」は物質的だけでなく身体と精神をむしばんでいく。場所の移動、食にかかわる産業にとつて安全は「絶対的」だ。それが儲けのために切り捨てられる。

今、労働運動は一九世紀の時代へと舞い戻った。国際労働運動は八時間労働制を求めた。第二次世界大戦後、国際的労働運動は週四十時間制、三十五時間制を国際基準とした。その基準の背後で、日本では年間二千時間をはるかに超え働かされている。年間総実労働時間千八百時間への時短、労働のあり方―ワーク・ライフ・バランスが労働運動最大の課題となった。生産性向上、科学技術の発展は生活様式を大きく変えた。それによって「生活水準が上がったか」が問い直され始めた。労働運動は明らかに「再生」への時を迎えた。

「成果配分論」の限界

連合中心組合はどうしようもないダラ幹が支配する組合だ。だが上述の矛盾が連合内にさまざまな変化を生み出し始めた。

大企業労組は企業別組合だ。彼らは「成果配分論」を主張する。「成果配分論」で中小・下請・未組織労働者の生活は守られるか。トヨタ一千万の「賃上げ」要求で、中小・未組織労働者の賃上げ、生活向上はあるか。ない、逆だ。中小企業は「トヨタさんだってあれだよ。我が社なんてトテモ、トテモ」と彼らのささやかな要求を切り捨てる。「働かせてもらっているだけでもありがたいと思え。代わりはいくらでもいるんだ」といわんばかりにある。

大企業組合の「成果配分論」は中小・未組織労働者の要求とはつきり対立することが明らかとなった。連合の中心はJCだ。JCにもJAM（機械金属労組）のような中小組合が多い。自動車、電機だって七〇%が組合員三百人以下の中小組合で構成される。彼らは親会社から納期・単価切り詰め犠牲者だ。

「成果配分論」で統一要求は可能か。不可能だ。「成果のない」企業には要求でき

ない。好況期にも赤字企業は少なくない。だから統一要求はない。連合が「春闘」で統一要求基準を放り投げた本当の意味である。統一闘争はどうか。これもない。要求がバラバラでどのように統一してたかえるというのか。

J C運動が日本労働運動の中心になり、階級的労働運動が片隅に追いやられたからであろうか、J C幹部からホンネが露骨に発せられる。

生々しくは基幹労連、自動車総連会長の発言だ。基幹労連委員長は「成果配分方式では統一要求ができないんです。赤字企業に成果はありませんから」といい、自動車総連会長は「単組だけよければいいんです。他は関係ありません」と臆面もなく言い放つ。基幹労連（鉄鋼・造船）は隔年春闘で前線から姿を消した。自動車は個別企業の支払い能力論で要求はバラバラ。電機は職種別賃金要求というわかりにくい方針をかかげる。J C共闘は崩壊した！

「古い」組合と「新しい」組合

J C中心労組が「たよりにならない」「ことをよく知るのがJ Cの一員であるJ A M、中小・パートの組織化で「モデル」をつくるUIゼンセン同盟である。J A Mは構成組合の八五%が三百人未満、六一%が百人未満の中小組合である。UIゼンセンも同じ。全体の半数以上の会社に定昇制度はない。

J C中心組合が「ベア・ゼロ」「賃金改善千円」で彼らは賃上げを勝ち取れるか。J C共闘の枠にとどまっていたはムリである。これら労働組合は「大単産にたよっていれば、生活・労働条件は守れない」、「自ら闘う他ない」と、連合の枠のなかで独自共闘をもさくした。中小共闘、パート共闘であり、〇七春闘で開始された新しい共闘「有志共闘」である。

「古い」組合にたいし「新しい」組合の誕生である。「古い」組合は大企業正社員を、「新しい」組合は中小・不安定雇用労働者を組合員とする。流通・サービス産業では不安定雇用労働者が全労働者の九〇%を占める。不安定雇用労働者（パート、派遣、請負、嘱託等）なしには大企業すら存続することはできない。労働運動再建への条件である。

「新しい」組合のモデルのもう一つが地域ユニオンだ。地域ユニオンは発展中だ。組合員数は多くて数百人、百人前後が圧倒的だ。大企業労組幹部の賃金は重役なみだ。ユニオン専従者の賃金はよくなって「ワーキングプア」なみ、多くは無償でつれ合いの扶養家族だ。彼らの楽しみは組合員の笑顔と組織の拡大である。地域ユニオンのモデルである武庫川ユニオンは結成二十周年を五百人で迎えようと訴える。

◇ 読者からのおたより ◇

佐高講演会大成功 神奈川・障がい者の社会参加を進める会の呼びかけで共同活動として取り組んだ講演会「経済評論家佐高信さんが語る『戦争と庶民・障がい者のくらし』」は、去る六月二日、横浜市内の波止場会館に、約八〇人に上る多くの市民の参加で盛会をおさめました。地元神奈川をはじめ、東京、千葉の障がい者とサポーターが協力して、多くの市民に口コミで講演会を広め、参

加者の四〇％は女性で、協力要請した労働組合、民主団体からは約三〇人が受講するものとなりました。

編集部より よかった！さらにご健闘を。私めもいろんな障がい者の運動に力をもらっています。
(障がい者情報ネット)

退職、介護職へ 一千号おめでとう。昨年三月末に郵便局を五七歳で早期退職。現在、介護タクシ

ーの運転手をやっています。老後を安心して生活できる社会をめざしたい。(東大阪・J)

編集部より 郵政、辞める人多いんだそうですね。どこの職場も同じ。介護職場の労働条件はい

かがでしょうか。若い人たちが本当に楽しそうに仕事していらいっしやる。

一千号、三十年 一千号、三十年の継続、言葉で言うのはかんたんですが、この間の労苦に頭が下が

ります。国鉄闘争も一歩前進ですが？ これからの闘いが重要。

編集部より 私なんぞたいしたことありません。Tさんたちの方がもつとたいへん。
(神奈川・T)

フザケルナ！ 職員給与一〇％削減、来末三月まで。今度は五％で延長の動きあり！自民党知事・

高橋はるみフザケルナ！参議院選野党勝利でギャフンと云わせてやるゾ！
(北海道・I)

編集部より Iさんのおっしゃるとおりになった！ まず第一段階、大成功。とりあえずは自民

党を大混乱に陥れたことで良しとしましょうか。

なつかしい 一千号おめでとう。一千一号の蓑輪さん、たいへんなつかしい。
(茨城・T)

編集部より 蓑輪さんとは月一回勉強会やっています。お便りの件は伝えます。

残金カンパ 一千号おめでとうございます。共にガンバロー！ 残金はカンパ。
(埼玉・M)

編集部より カンパに感謝。たまにはお会いしたい。

働らき続ける 五十歳以上は三割カット、五十歳未満の社員には福岡市や北九州市への配転(原則

二年とはいうが)攻撃、赤字のすべての労働者に転嫁することで乗り切ろうとする会社。「アキラ

メズに要求し続けよう」と訴える一方で、アキラメようとする自分に気付きませす。働らき続けるこ

とも闘いです。
(鹿児島・T)

編集部より 会社ってデカくなればなるほどケチになる。『共産党宣言』でマルクスが大昔に書

いてます。だから労働組合が必要。その必要性を如実に示したのが今回の参院選でした。本当の

たたかいはこれからです。

一千号おめでとう 心からお祝い申し上げます。それにむけてのご苦勞は云い表せないものがあつ

たことと、推察申し上げます。これからお身体に気をつけ、常に先を導く社会通信であつて下さ

い。
(千葉・T)

編集部より 三十年よくやつてこれたと、我ながら驚いています。読者のご支援のおかげ。Tさん

さらにご活躍を！
(東京・A)

継続 少し休みましたので、これから継続します。

編集部より お久しぶり。先日、取材仲間が「Aさんに合ったよ」っていつておりました。

遅くなりまして 教育現場の状況について、後日レポートしたいと思えます。
(宮城・A)

編集部より ぜひぜひお願い。楽しみに待っています。

羊たちの憤り 安倍小僧は小泉のマネをして「改革か逆行か」、「成長か逆行か」などと叫んでいた。

小泉劇場に乗せられた羊たちはダマされなかった。ろくでもない口先だけの「改革・成長」などむ

しる無い方がまだましなのだ、と。「資本」、「セレブ」たちだけの改革・成長よりも、「生活第

一」の方へ振り子が揺れた。羊たちは、少しは賢くなったのかもしれない。「ネンキン怨み節」の

大渦に憲法諸党・会派は呑み込まれてしまった。
(物書き・M)

編集部より 主導権は二つの保守党にありますものね。安倍君はともかく総保守は憲法改正には

念には念を入れています。

共同をひろげる 原和美と9条ネット、とくに兵庫選挙区をたたかった原和美は「9条改憲阻止」

を訴えて健闘し、前回よりも得票を伸ばした。今後とも「9条改憲阻止」の共同を大きく広げるた

めに全力をあげる。
(9条ネット・ひょうご)

一・五四対〇・四六 比例区で議席を獲得するためには、どんと方式で四十八議席目を割りふられ

た公明党の票数は約百十一万、率にして一・五％。9条ネットは八十四万票たりなかったことにな

る。社民党、共産党とともに議席を減らし、憲法の危機はさらに増した。選挙結果は我が足腰の現

状を受け止め、ここから政権阻止の闘いをすすめていきましょう。
(奈良・I)

展望見出す議論 憲法問題が争点からはずれ二カ月間では9条ネットの訴えは国民に浸透せず、議

席獲得には遠く及びませんでした。今後の展望を見出す議論をしたい。
(東京・K)